

風狂隨身 原子朗

「隨身ずいじん」とは「供として従い行く」といふ意味のほかに「身につけて持っている」という意味もあるようだ。よく似た「同伴」という語も「つき従う」を意味するかと思えば「伴なう」という場合もあって、用いかにより主従逆転、曖昧といえれば曖昧な日本語、いや漢語でもあるようだ。

ここにいう私の「風狂隨身」も、だからこじつければ、先ず、高き風狂者に従い行く私の供奉のこころを意味し、かつまた、私みずから風狂のこころさしを押し従えて、生きているという私の決意をも意味するものになるだろう。ここではその両者である。しかし考えてみれば、もともと風狂の志がなければ供奉の心も起こるまい。それなら「風狂隨身」に関するかぎり、主従合一、語の矛盾も最初からないことになる。

語義はともあれ、私の供奉の心を先にすれば、私は先ず中村俊定先生の御名をあげさせていただく。先生は私の大学時代の恩師であるが、数かずの教えを受けた諸先生の中で、私の畏敬し、あこがれた先生は素白・岩本堅一先生と中村俊定先生のお二人であった。というのも両先生とも超俗高雅

のお人柄のゆえであった。いや「お二人であった」というのは私の失礼であって、岩本先生はすでに故人となられたが、中村先生は駑蕩たうたうとして御健在、その御健在ぶりは本誌の読者ならば昨年「文芸論叢」15号の先生の「風狂雑記」によってご存じのはずである。私もまた右の御文によって、ひそかに益々供奉の心を強くしたのである。

岩本先生のこととはほかでも書いたのでここでは割愛させていただくが、中村先生は、

またない碩学しやくであられながら（いや、それだからこそであらう）およそ世間の地位や名譽などとは全く無縁の世界に悠々微笑しながら生きておられる。それは短章とはいえ、さきの先生の「風狂雑記」によっても明らかである。いわば終始我執をつづりながら、文はおのずから我執をはなれて悠揚、たとえば無心の蝶の菜圃にあそぶ感えいただくのは私だけではあるまい（「菜圃」とは先生の別号にちなんでさういう）。

そこへいけば私のような謙抑を知らず、他を顧みるにも絶えずおのれの影をふみ、たとえば、蝶を写しても実は自分を語っているにすぎないような文章を書く人間には、のどかにして艶をふくむ先生の御文や生きかたは、まことに高嶺の花というべきであらう。しかしまた、それだけに先生の風狂にあこがれ、それこそ随伴したいという気持ちには切なるものがある。

また、風狂とは風雅に徹すること、と辞書にはある。してみれば、およそ風雅とは縁のなさそうな粗忽無頼の人間が、なぜ風狂にあやかろうとするのか。それは古来の風狂者が、ことさら雅を立てず銜くちかわず、むしろ俗に交わって俗をつきぬける詩魂の持

主であるという、私には身近さがあるからだ。つまり俗を忌避せず蔑まず、いっそ俗をたのしむ入遊びVの境地に、風狂の思想は発生するものであろう。

遊び、ということになれば、ありがたいことに、もはや風狂は半ばわが手にあるといつてもよい。すなわち、当初にいった、風狂のころざしを私はつとに持ち従えて生きている、そういつてもさして過言にならないだろう。

三か月ほど前、昨年十月中旬に銀座の小さな画廊で、古くからの詩友三人で「三戯展」と称する展覧会をやった。今空也ともいふべき池崇一君の木彫と、世界で唯一独創の技法に遊ぶ平野充君の油絵と、私の気ままの書と刻字の三様からなる「三戯」であった。多勢のお客がつかけて下さり、一週間を私はお客持参の祝儀酒に酔いつぶれてすごした。お客の中には「ご器用ですね、多芸多才」とまじめに世辞をいうひともし少なくなかった。私の最もきらいなその世辞を、祝儀酒の手前、また俗をたのしむ風狂の志の手前、私は聞きながした。そしてシラフではとてもいまい、いえまいと思われるような口上を、酔いに乗じて口ばし

り、あろうことか、遠来の客を煙にまいたりした。曰く——書は視覚による時間の芸です。流れよどみ、また走り、停止する、ついには永遠の停止と、無限の動きを欲情し暗示しておわる時間の芸。いかなれば墨色による音楽、あるいは黒と白のダンスです。考えてもごらん下さい。現代人は時計の時間に駆使され、ついには意識の時間までも均質化され、相對化されています。ちょうど経験が重みを失ない、ことばも文章も、人間までも機能化され、均一化されているように。少なくとも私の書は、そうした現代への抵抗です。私は、一管の筆によって時間を辛領し支配する、いわば時間の独裁者です。独裁者のおそろしい遊びかもしれません。

——木に字を彫る、実はこれこそ時間と根くらべ。伐りたおした木の枝やマナイタに研ぎすました刃物で立ちむかう、爽快な抵抗、ほとんど陶酔的な抵抗といえましょう。私のサディズムです。

お客は煙にまかれながら「いいですね、金がかからなくて。最近おはじめになったんですか、書や刻字は」という。

とんでもない、といたいところだが、

こらえて「ええまあ」とごまかしておく。たしかに実はとんでもないことなのだ。金がかからないなんて。筆硯紙墨、ものごころつくころから能うかぎり高価なものに親しんできている。手すきのいい紙があると聞いては遠くをいとわず走ってゆく。おもしろい木があると聞けば飛騨や木曾の山奥まで、金属の馬に跨って走る。金属の馬とは、オートバイを私はそう呼ぶ。風をきいて走る。これなら、どんな山道も湖畔の小さな道も平気だ。荷台には絵具箱や、時には釣道具、料理のできるガスボンベや鍋まで積むこともある。川や湖畔で釣糸をたれながら流木をひろう。流木には字を彫る。馬を飼うかわりに目下のところ四〇〇ccのオートバイを私は愛用している。昨秋はこれで九州まで走った。風をきいて走れば風さわぎ、金属の馬上、まさに風騷のひと。

みんなを心配させるので、よほど親しいひとにしか風騷のたのしみを私は話さない。ただ、道楽風狂には金がかかること、それ以上に時間が（濃密な時間だが）かかっていること、そして何よりもいのちがかかっていることを、あまり人は知らない。